

学び方に困難がある生徒の学習支援

～高等部から大学での学びを通して～

魔法の言葉 沖縄セミナー
澤岬 圭祐

対象生徒の実態

- ・ 特別支援学校卒業生大学2年生
- ・ 障害
脳性まひ（アテトーゼ型）
- ・ 支援員を利用しながら、普通小、中学校に通学していた。
- ・ 小・中時代はICT機器を活用しながら学習した経験はほとんどない。
- ・ ボッチャの日本代表候補



普通校受検について

- 代筆及び時間延長措置（1.3倍）
- 白紙に書いた文字を代筆者が解答用紙に代筆
- 時間が足りず全ての問題を解くことはできなかった。
- 「自分の実力を発揮できなかった」という悔しい気持ちを今でも持っている。

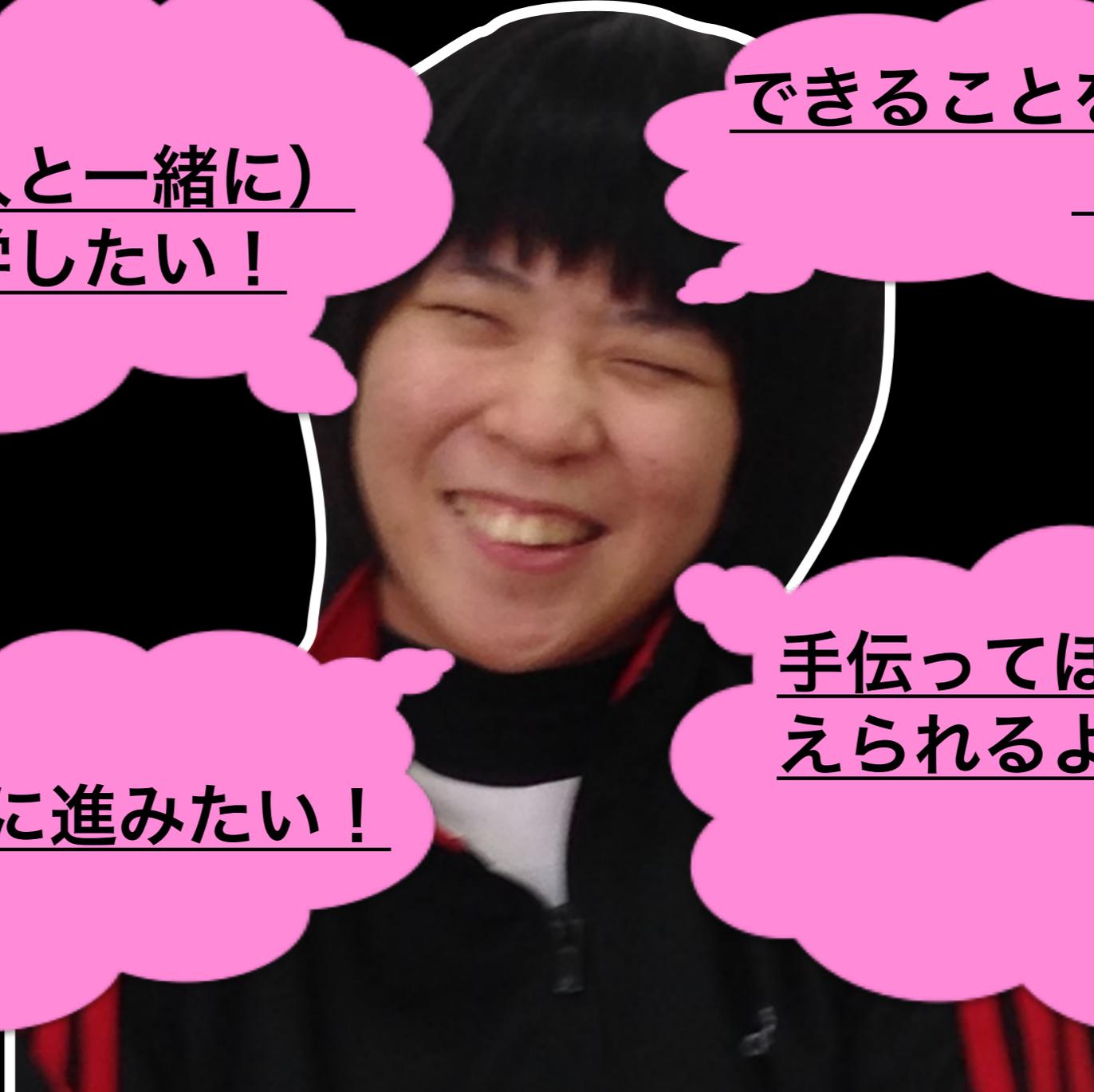
Aさんの夢・希望

(地域の友人と一緒に)
大学に進学したい！

できることを増やしたい
！

福祉関係の道に進みたい！

手伝ってほしいことを伝
えられるようになりたい
！



Aさんの理想像

地域社会や集団の中で



支援機器を上手に活用しながら、自分自身を高めていくことができる。

知識を活用したりや持てる力を発揮したりしながら活動（学習・働く等）できる。

一人では困難なことや支援してほしいことを周囲の人に依頼しながら調整していくことができる。

Aさんの葛藤



自分で「できる」！！

人よりもっと頑張ればいい！
(人より努力が足りない)

これまでの学習方法（紙と鉛筆）を
変えるのが怖い…

高等部での取り組み

学習環境の整備・「学びのスタイル」の確立

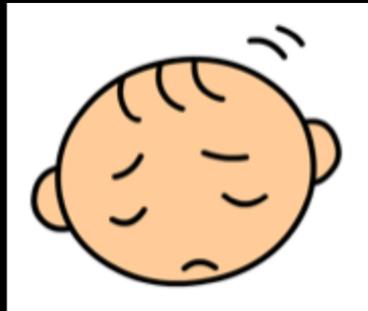
ICTの活用

成功体験を増やし、達成感を得る！

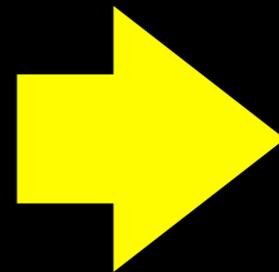
自己理解や自己肯定感を高める

必要な配慮や支援を理解し、調整できる！

「学びのスタイル」の確立

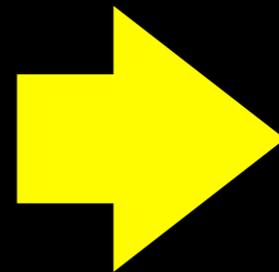


ページめくりが難しい

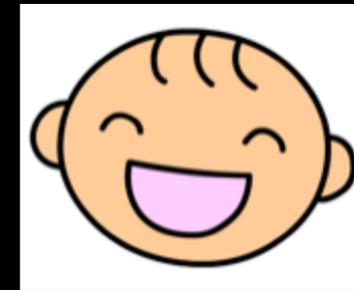


教科書をiPadに取り込む！

書字に時間がかかる



書字の代替をPCに！



「学びのスタイル」の確立

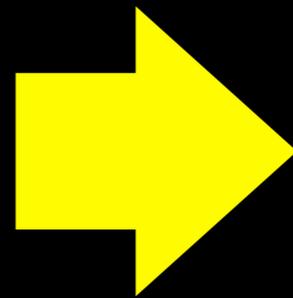


- 他教科の授業にも入り、支援方法や学習方法について情報交換
- 生徒の情報共有を行いながら、一貫した支援に

授業での変化（職員から）

活用前

- ・ STが常に支援
- ・ Aさんの記録速度に合わせた内容
(ゆっくりとした進度)
- ・ 練習問題等の理解度を測るための確認が難しい。
- ・ 進めることが中心になり、内容を深めることが難しかった。

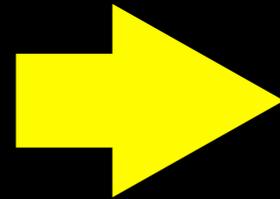


活用後

- ・ STが最初のセッティングを行うのみですむため他の生徒の指導に回ることができるようになった
- ・ 進度が早くなった。
- ・ 練習問題や授業の中での発問、調べ学習等を組み合わせながら学習内容を深めることができるようになった。

模擬試験での活用

紙の問題用紙と解答用紙



問題用紙をiPad
解答用紙はPC入力

英語（時間1.3倍）

Excelで入力し、回答。

数学（時間2.2倍）

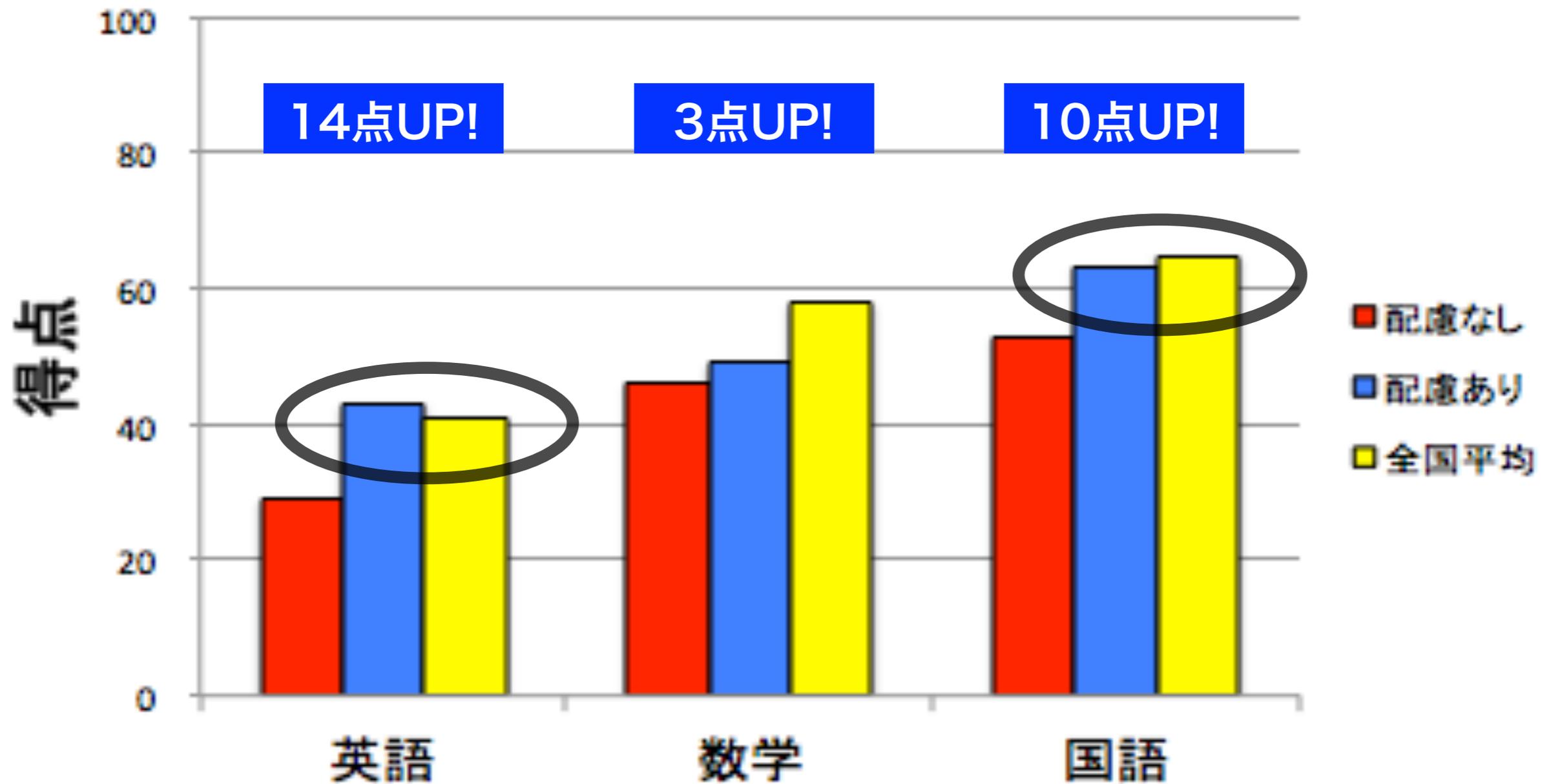
計算過程等はWordを使用（数式エディタ）。

回答は職員による代筆。

国語（時間1.4倍）

Wordで回答（Limeを活用）。

模擬試験での活用

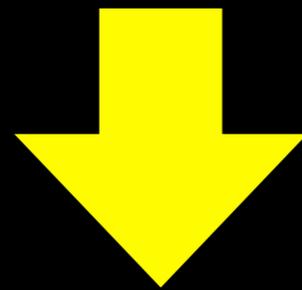


配慮の有無と試験結果

能力が発揮できる環境の整備

昨年度までの取り組み

- アセスメント（WISC-III、URAWSS等）結果
- 普段の学習法
- 模擬試験の結果 など

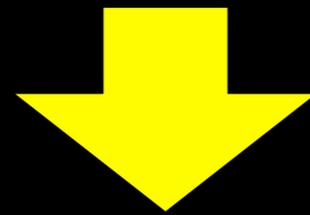


大学側へ申請、調整

大学への移行

大学生生活での課題

- 職員の障害への専門性
- 支援体制、学習環境の構築
- 講義時間、講義の進度



大学の講義を体験！

代筆サポートの利用



代筆サポートでのノート

代筆サポーター
(学生ボランティア)

No. _____ Date _____

社会学概論Ⅱ

※ 高度消費社会 = 「コトナラビの差異化」
→ コトナラビの差異化による格差とは…

① 「ちがひ」や差別の基準を説明する必要がある。
② とくど「ちがひ」を共有できる
③ 時折お互いの「ちがひ」のくつまた合いが許容されること。

※ 「連地性」
「ちがひ」がある限りにおいて、「人と同じ」であることと望む
心的傾向。

※ 参考: ショッピングモールと「コトナラビの差異化」空間。
◎ 類似した価格と商品構成のテナントが、水平的な建築構造の
内部(売り場は2Fまで)でコトナラビ。

※ 人はあらゆる手段を尽くして差異化のフロンティアを押し出す。
→ 「人とちがう」ことが「一般大衆」に流布しはじめると、そこから
承認可能な範囲内で差別し、「新天竺」を押し出す。

「個性」は、商品広場の戦略によって変動する。
商品のチョイスという自由度の中の「個性」。

3. 消失する他者の身体 - 「見られる身」と「見られる身」 -
◎ 個々の身体が消失するとは、目に見える身体から、目に見えない、理想的な
身体への変容。
→ ある商品を消費するとき、それと同じようなモノを所有する他者と接触
する必要が消失。
モノや情報が必要となり、「どこかで誰かがそれと同じようなモノを
もっている」と分がりやすくなるという感覚。
(身体がない、身体が消失した他者)。
※ 高度消費社会: 情報の伝達を介して結合する共同性。
藤 (望月照彦『都市は未開である』1978年)

例) 『ライフスタイル提案』の向き展開。
◎ かつてモノを所有する(わたし)は、他者から「見られる」ことが
前提にあった。
→ しかし、その想の共同性(知性社会)へと変化した現在、
「わたし」を見る視座とは「わたし」だけということに
なってきた。

◎ 「私のためのだけの自己表現」 = 私というものをカメラ・アイ。
(メディア・アイ)

※ 「ミニマムセルフ」(最小限の自己)
C. ラッシュ 『パルシズムの時代』1984年。
→ 完全に映し出された自己に魅了されるナチストのように、
「ファンタジー」の世界で「アイデンティティ」を確保しようとする
志向性。
自らのアイデンティティを脅かすような外界を異質にし、
「ファンタジー」という「鏡」を振り回らせ、防壁(シールド)の
中に自己を囲い込み防衛しようとする。

※ 「隠しカメラ」のようにならば、自己を内面化した主体。
※ 「ちがひが分かる」社会から、「分かる者にだけ分かる」社会へ。

4. おわりに。
◎ 高度消費社会は、消費を「市民の義務」として強制するシステムを
確立。
→ モノの消費によって「個性」を過剰に要求する社会。
たがいに、消費はイメージ(記号)によって一時的に自己の欲望を
充足させる。しかし、消費は「量」にはおろかして、自己と折り合
(調)にはならない。
修

No. _____ Date _____

授業体験を終えて

本人の感想から

- ・ 大学生生活についてイメージができた。
- ・ 講義のスピードが速いので、メモなどは難しい。
- ・ 紙ベースの資料ではアクセスに限界がある。
- ・ 障害を持った先輩の存在は心強い。
- ・ 代筆サポートはとても助かるので、お願いしたい。
- ・ レポートや課題は現在のようにPCで行いたい。

昨年度の取り組みを経て



「社会」での自立を見据えて

- 今後の社会の流れ
- 「合理的配慮」についての理解 など

「ワンド・宿題」の自省

- ・ 自分自身で環境を整える「力」は育めたのか
- ・ 「特定の人」への依存を強めたという側面はなかったか・・・
- ・ 機器の活用について本当に評価できていたのか
・・・
- ・ 入試の突破は、他の要因もあるのでは？

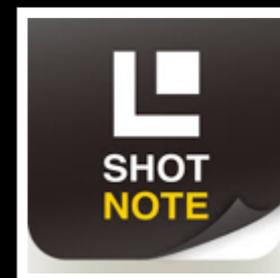
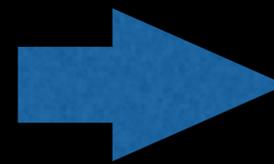
大学での学び

- ・ テスト or レポートで単位認定
- ・ 代筆試験（口述試験：別室）
- ・ レポートはパソコンで作成
- ・ 中学から取り組んでいたボッチャでは全国大会、世界大会出場

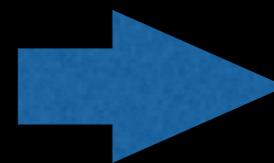
大学での学び

講義

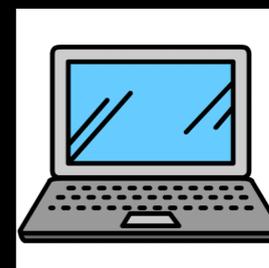
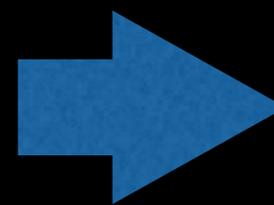
サポーターがいる



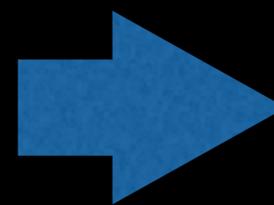
サポーターが不在



レポートや課題



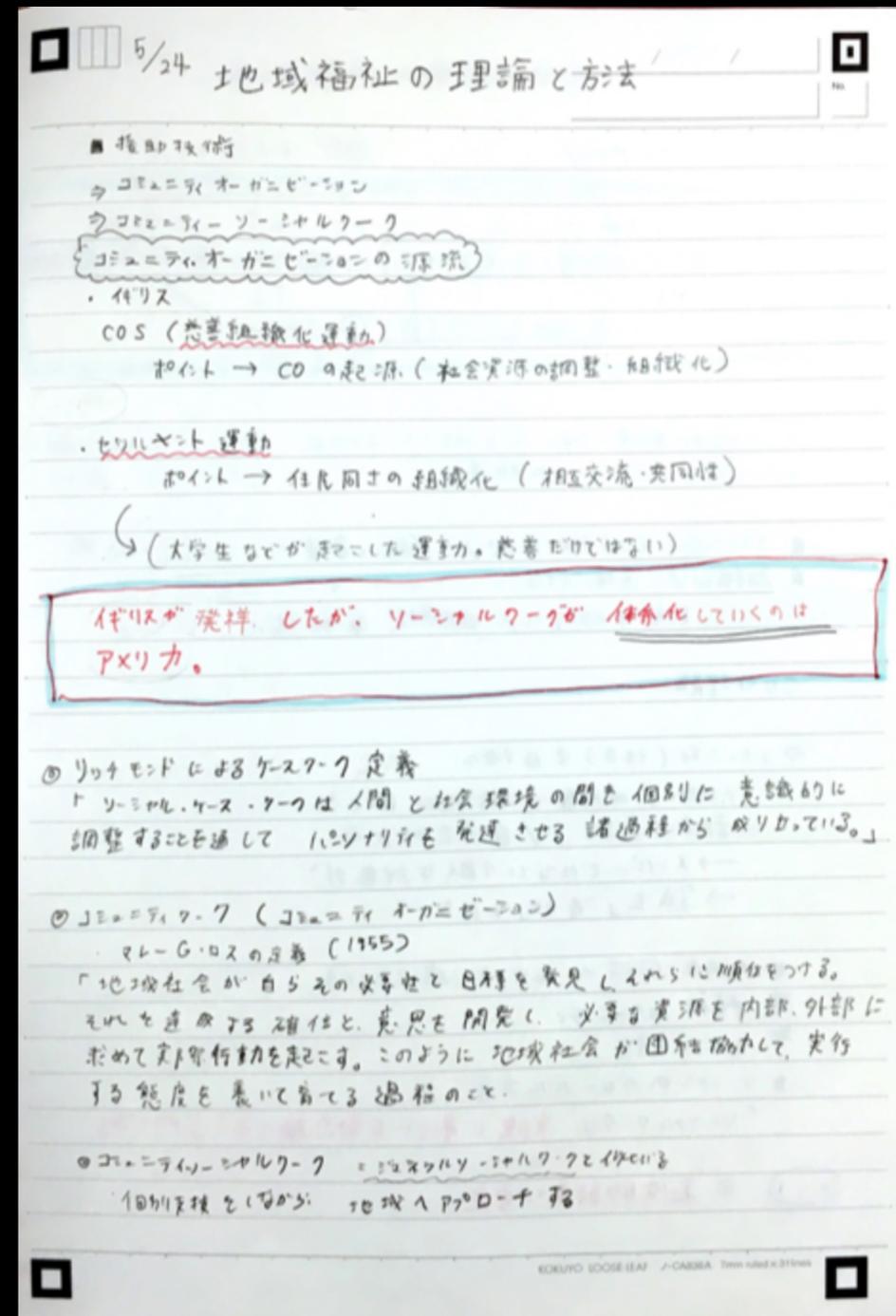
ちょっと使いたい
(横になりながら等)



大学での学び



- 代筆サポーターに書いてもらったノートを簡単にPDF、デジタル化。(SHOT NOTE)
- 振り返るのに便利との感想



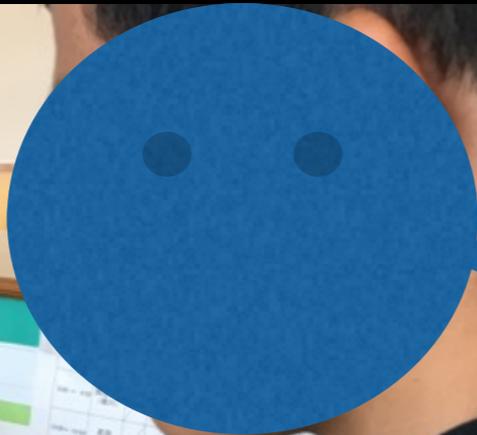
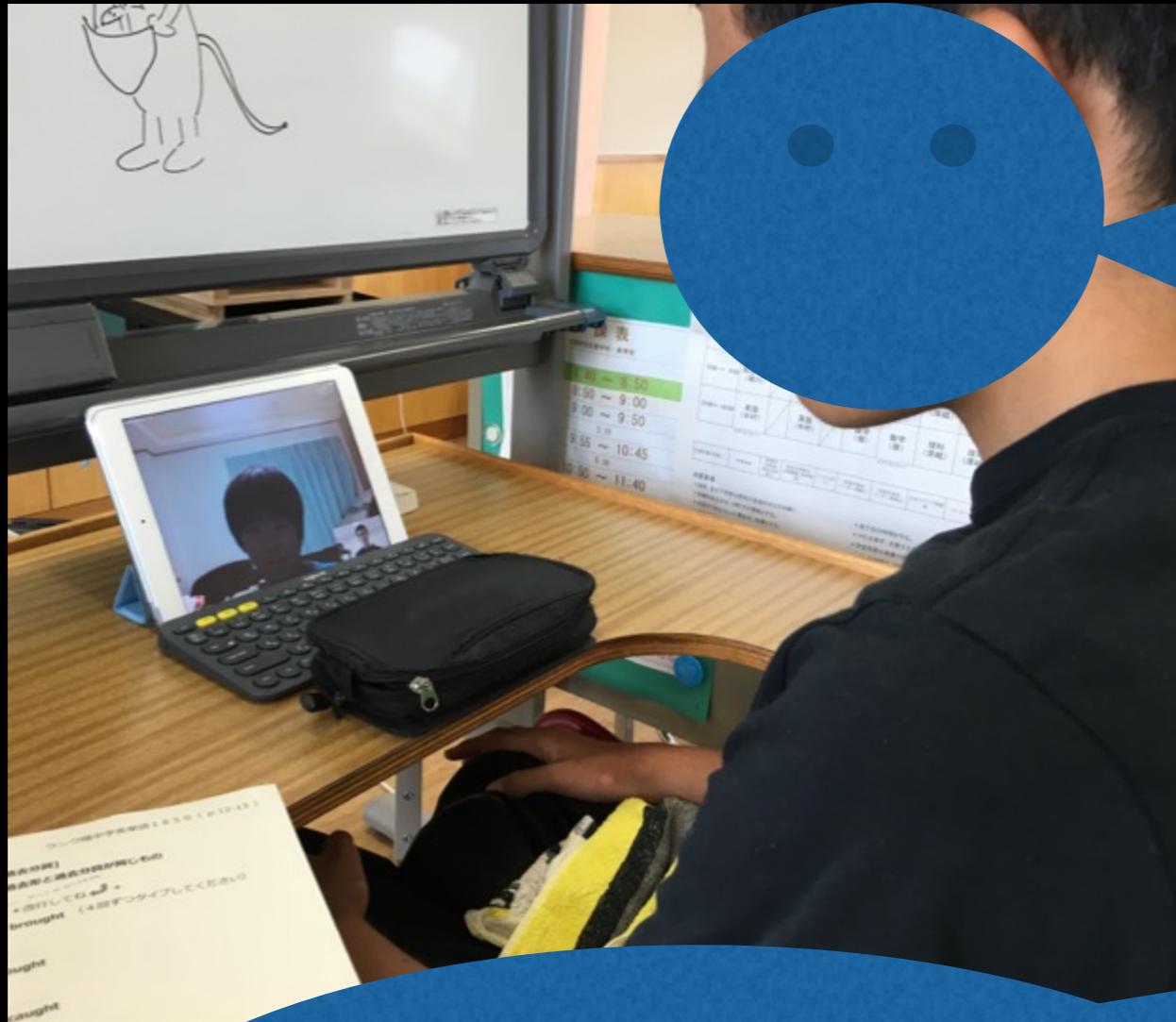
大学生活について

Q：大学生活は？
まあまあです。

友達といるときは、いちおう楽しいかな～



現任校生徒との交流



高等部でどんなことを学んだんですか？



大学について教えてください！

彼女から語られたこと

Q：高等部の間に身につけたほうがいいことは？

A：自分から人に話しかけることはできるようになっていたほうがいい。近くにヘルパーがいない時に他の人をお願いしないといけない。



上手に支援を求めていくことができるようになっていく！

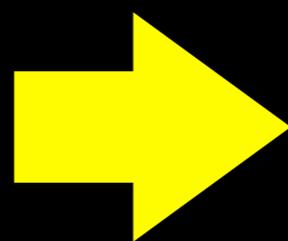
入試合格・大学入学はゴールではない

持てる力を発揮し、社会で輝くことが重要！

高等部入学時

現在

支援方法が限定的



柔軟に支援や機器
を選択

取り組みの意義

- ・ 「できる」自分への自信
(模擬試験や大学合格など)
- ・ 無理なく (楽に) できる
- ・ 特別支援学校の環境

など

授業体験の有効性

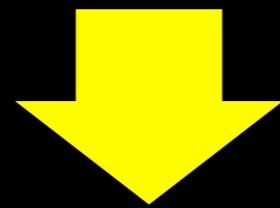
- ・ 支援を体験できたことで、
より具体的にイメージを持
てた。
- ・ 作戦を立て、移行していく
ことができた。

など

彼女の事例から

彼女の何をICTは支えたのか？

大学で、自分自身で書くという学習手段の限界を感じた。ただ、それを受け入れた時にiPadやiPhone、PCがあることで、自分でも大学で効率的に学ぶことができると思った。（彼女への聞き取り）



自分にも学ぶ方法があるということ。それが学習環境や必要な支援について考える原動力になっている

彼女の事例から

- ・ 高等部時代の成功体験などを通して、ICTを活用し「(楽に) できる」ことができ、自信をつけたことで、必要な支援や環境について考えることができるようになってきている。
- ・ 教科の特性や自分自身の特性にあった学び方について、機器による支援だけでなく、一歩踏み込んだ取り組みが必要なのではないか。

ご清聴ありがとうございました！

！

